

年頭にあたり

藤井 雅彦

(日本画像学会会長 慶應義塾大学 SFC 研究所)



2025 年の年頭を迎え、日本画像学会会員の皆様に心よりお慶び申し上げます。

今年の干支「乙巳(きのとみ)」は、木の芽が芽吹き、成長の兆しを示す年を表しています。日本画像学会にとっても、少しずつ始まった変化が次第に形を成し、未来に向けた大きな可能性を示す年となることを期待しています。

昨年(2024)の4月に発表し、学会誌8月号に掲載した4つの会長方針について、役員や会員の皆様の取り組みにより、少しずつではありますが確実に成果を上げていると感じています。

日本画像学会のスコープ技術を活かす場所(アプリケーション、サプライチェーン)の拡大については、現在、「加飾」「デジタルテキスタイル」「プロダクションプリンティング」「2.5D/3D」といった4つのタスクが、日本画像学会の技術を中心にどのようにして活動の範囲を広げられるかについて検討を行っています。また日本視覚学会や日本機械学会など他学会とのコラボレーションも始まっています。ICJ2024ではこれらのタスク、コラボによるオーガナイズドセッションも設置されました。昨年(2024)から始まったImagingNEXTの赤で強調されたロゴの「X」は、画像分野とその他の領域を掛け合わせることで新たな価値を創出することを表現しています。いずれの取り組みも今年のさらなる発展が楽しみです。

技術者・研究者の成長の場としての学会の新しい役割と、若手や女性の参画促進については、秋のチュートリアルで経年15年未満の若手を対象とし、技術のみならず技術をとりにくく様々な観点から、市場での価値創出を考える企画が新しく始まりました。また今年のICJからは発表者へのより詳細で丁寧なフィードバックを行い、技術者・研究者の成長につなげようとする試みが企画されています。

キャズム理論に見られるように、初期市場と多くの人(消費者)を巻き込むマジョリティ市場の間には「キャズム」という深い谷が存在すると言われていました。このキャズムを乗り越える有効なアプローチの1つとして、初期市場において事例を作り、その後マジョリティが安心して参加できる環境を作ることが重要だと考えています。若手や女性の参画促進をマーケットに例えるのは不適當かもしれませんが、これまでの活動を「初期市場の開拓」とするならば、これらを確実に継続し、その成果を効果的に多くの若手、女性技術者・研究者に提示することが、今後さらに多くの人を巻き込む活動になると信じています。

4つめの学会の存在価値・認知度向上については、上記3つの方針を達成することにより実現に近づくと考えて

います。加えて昨年出版された書籍『画像処理の基礎』や学会誌12月号の英語クラスター論文の海外配布により、日本画像学会の知名度が広がることを期待しています。2019年に設立された4DFR研究会は、昨年(2024)のコンファレンスで過去最高の発表数になり、初めて海外からの発表もありこの技術領域において確固たる地位を築きつつあります。

このように我々の一步一步が確実に新たな風を吹き込んでいます。乙巳の今年(2025)は更なる革新と成果を期待したいと思います。

年の初めにあたり、時間についても考えてみたいと思います。

時間の感じ方が年齢によって異なることはよく知られています。特に、若い頃ほど時間が長く感じられ、歳を重ねるごとにその感覚が短くなるという現象は、まるで対数(LOG)スケールのようなのだと言われ、私も強く実感しています。20歳から30歳までの10年をリニアスケールで1とすれば、50歳から60歳までの10年はわずか0.45にしかなりません。この時間の感じ方の違いは、人生の中での経験や視点の変化を反映しているのでしょう。

しかし世代によらず私たちは同じ時間の流れの中に生きています。流動性知能に優れた若い世代は、未来に対する熱い情熱と無限の可能性を感じながら自らの成長や新しい技術の深堀を追求しています。一方、成熟した技術者や研究者は、結晶性知能ともいえる豊かな経験に基づいた深い洞察力で技術を俯瞰し、技術の進化やその活かし方を支えています。このように異なる時間感覚や能力、志を持った世代が互いに協力し、アイデアを交換し合うことで、技術はさらに進化し、豊かな社会の実現に貢献することでしょう。

これからも、若いエネルギーと熟練した知恵が融合し、共に画像技術の新しい道を切り拓いていくことを期待しています。日本画像学会もそのような素晴らしい融合の場として、皆様の成長と技術の進化を支える役割を果たしていかなければなりません。時間は有限ですが、その中で共に歩みを進めることで、技術の未来を創り出す力が生まれることを信じています。

最後に、今年一年が皆様にとって実り多き年でありませう、心よりお祈り申し上げます。共に手を携え、個人としても組織としてもさらなる飛躍を目指していきましょう。